（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	加藤 千博
論文題目	A View of Ecology in Utopian Works: The Traditional Elements of English Utopian Literature（ユートピア文学におけるエコロジー観―イギリス・ユートピア文学の伝統的要素―）		

（論文内容の要旨）

本研究は、イギリスのユートピア文学におけるエコロジー観を主題とし、エコロジーの概念がユートピア文学においてどのような役割を果たしているかを解明しようとするものである。検討にあたって、代表的な 6 作品を取り上げて、「語り」を中心とする文学上の技法を分析しながら、各作品からどのようなエコロジー観が読み取れるかを考察し、ユートピア文学に通底するエコロジー観を探究した。

第 1 章では、トマス・モアの『ユートピア』（1516）を取り上げ、二人の語り手によって形成された枠物語構造を分析した。本作品は、農本主義により田舎を重視する生活様式と、共有制により物質主義的な生活を脱し精神的快楽を求める価値観が、内枠の語り手ヒュトロダエウスによって提示されている一方で、その制度に対して、作者を偽装した外枠の語り手が反論するという複雑な構造になっていて、両者の議論から理想的な国家についての概念を読者が引き出すように仕組まれている。これにより、田舎と精神的快楽を重視する思考・生活様式が、この作品の土台を成すエコロジー観であり、産業革命よりはるか以前の 16 世紀に、モアがすでに環境に配慮した社会システムを考案していたことが明らかになった。

第 2 章では、ウィリアム・シェイクスピアの『テンペスト』（1610-11）を取り上げ、主人公でありかつ演出家的役割を果たしているプロスペローと、脇役ゴンザーローの台詞を中心に分析し、両者の価値観の衝突を通じて、理想の提示と現実批判が浮かび上がってくるものと解釈した。魔術と雄弁術により他者と自然を支配するプロスペローが、近代的なテクノロジカル・ユートピアを表象しているとすれば、ゴンザーローは、人間を自然の一部と見なす前近代的なエコロジカル・ユートピアを表象していると見なすことができる。相対的には、後者のエコロジー観が本作品では理想に近いという可能性を提示した。

第 3 章では、ジョナサン・スウィフトの一人称小説『ガリヴァー旅行記』（1726）におけるガリヴァーの視点を分析した。本作品では、精神的な成長を遂げる以前のガリヴァー、成長後のガリヴァー、語り手としてのガリヴァーという三つの視点を複雑に絡み合わせながら、作者自身のユートピア的国家観が、諷刺を交えつつ物語中に埋め込まれていることを明らかにした。かつてのアイルランドにおける自然と調和した風景と旧式の農園、そしてテクノロジーに頼らず自然と同化したシンプルライフが、本作品におけるエコロジー観の特色であると解釈した。

第 4 章では、ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』（1890）における三重の語り手から成る作品構造を分析し、主人公ゲストの視点に、ゲスト本人だけではなく、語り手「わたし」の形を借りた作者モリス自身や、他の人物の視点が混在していることを指摘した。このような曖昧性を含んだ語り手兼主人公が、その他の登場人物と交わす対話を分析することにより、モリスのコミュニズム思想、ユートピア観、エコロジー観等がいかに反映され、相

互依存的な概念を形成しつつ、ひとつのヴィジョンをまとめ上げているかを、明らかにした。

第 5 章では、オルダス・ハクスリーの『島』（1962）を扱い、主人公ウィルの思想的・精神的成長が、「ビルドゥングスロマン」のプロットの型や「意識の流れ」の手法を取り入れつつ物語化されることにより、エコロジーの主題が前景化されていることを指摘した。偽善的キリスト教思想や西洋的消費主義社会が諷刺されている本作品では、その対極をなす脱消費主義的な生活や、仏教思想の流れを汲む禅的で簡素な生活スタイルを理想とするエコロジー観が提示されているものと解釈した。

第 6 章では、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』（2005）における語り手キャシーの役割を分析した。キャシーは、自分たちクローンの育った寄宿学校ヘイルシャムのディストピア的性質を隠蔽し、ノスタルジックに語る役割を担っているが、作者はその語りのなかに、クローンをも使い捨てにする消費主義への批判と、原子力の平和利用という幻想に囚われた人類の愚かさへの批判を埋め込んでいるものと解釈できる。本作品からは、アナログ・テクノロジーで充足し、クリーンエネルギーを推進していた、前時代の社会を理想とするエコロジー観を読み取った。

以上の 6 作品についての検討から、ユートピア文学を貫いている理想と現実批判に関する共通項が浮かび上がってきた。すなわち、モアの『ユートピア』において提示された、田舎に価値を置く社会システムと、精神的な快楽を重視し質素な生活を営む人々の価値観が、その後のユートピア文学においても、形を変えつつ理想として提示され続けていることが明らかになったのである。他方、近代的で合理化された都会の商業主義的な社会システムと、物欲や私有欲に駆られた物質主義・消費主義的な生活様式は、いずれの作品でも批判の対象となっている。モアが『ユートピア』において提示した精神的快楽とは、知的向上心と節度ある生活を実践しているという自覚から生じてくる「心の充足感」であり、それを幸福の尺度とする思考様式が、彼の描いたエコロジカル・ユートピア社会を支えるイデオロギーとなっているのである。以上により本論文は、イギリス・ユートピア文学の伝統において、「エコロジー」の概念が、重要な文学的要素として、その発端から一貫して継承されてきたことを立証した。

（ 続紙 2 ）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、イギリス・ユートピア文学のジャンルに位置づけることが可能な作品として、トマス・モアの『ユートピア』、ウィリアム・シェイクスピアの『テンペスト』、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』、ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』、オルダス・ハクスリーの『島』、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』を取り上げて、それらの物語構造を分析することにより、それぞれのユートピア観を抽出し、体系化するというスケールの大きな研究である。上記の 6 作品は、16 世紀以降の各世紀から代表的なイギリス・ユートピア文学として一作品ずつ取り上げたものであるが、それらの作品の特性から共通項を見出すことにより、時代を超えてこのジャンルに通底するエコロジー観とは何かを解明することが、本研究のねらいである。

序論でも指摘されているとおり、エコロジーという言葉が使用され、「エコロジー・ユートピア」という文学ジャンルの存在が認められるようになったのは、19 世紀後半であるため、それ以前の時代の作者であるモア、シェイクスピア、スウィフト等がエコロジーの概念を意識して作品を創作したとは考えにくい。しかし、現代的視点からそれらの作品を捉え直し、エコロジー観を読み取ろうとする本論文の試みは、環境問題が喫緊の課題となっている現代人へ向けて、重要な示唆を与える契機となる意義がある。文学作品をエコロジーの観点から捉え直すという研究はこれまでじゅうぶんになされてきたとは言えないが、21 世紀に至ったいま、今後活発になっていく可能性を含んだ領域であり、本研究はその先駆けとして大いに貢献することが期待できる。

先行研究としては、オランダのマリウス・デ・ジウスによる「エコロジカル・ユートピア」と「テクノロジカル・ユートピア」の対立概念の提唱があり、本研究はこれを出発点として、その議論を深化・発展させたものとして位置づけることができる。しかし、デ・ジウスは政治学者としての立場からユートピア文学作品のエコロジー要素に注目したものの、作品が具体的に何を理想化し、何を批判しているかを明らかにするには至らかった。そこで論者は、文学研究の立場から、それぞれのユートピア文学のテキストを分析することによって、作品中の理想提示と現実批判の在り方を、構造的に明らかにしたうえで、そこに含まれているエコロジー観の探究を試みた。したがって、先行研究を踏まえつつ、独自の新しいアプローチにより、一貫したテーマを追究している点に、本論文の価値が認められると言える。

第 1 章の『ユートピア』についての論考では、外枠の語り手と内枠の語り手から成る語りの構造を検討し、登場人物としてのモアと作者モアの立場の相違を示すことにより、作者モアの意図を探っているが、16 世紀は小説誕生以前の時代であるため、語りの手法を分析すること自体が、稀な取り組みとして評価できる。第 2 章では、『テンペスト』における主役と脇役の台詞を分析し、両者の自然観の衝突の構造を検討することによって、シェイクスピアの本作品をユートピア文学として位置づける可能性を示した。第 3 章では、『ガリヴァー旅行記』における語り手ガリヴァーの視点の変化を分析することにより、諷刺作家スウィフトの理想とする自然観について考察するという有意義な試みを行った。第 4 章では、『ユートピアだより』の三重の語り手の構造を分析することによって、作者モリスによる人物造形の手法を明らかにし、エコロジカル・コミュニストとしてのモリスを再評価した。第 5 章では、

『島』における小説形式を分析することにより、代表作『すばらしい新世界』以外のハクスリー作品の技巧に新たな光を当てた。第6章の『わたしを離さないで』論では、主人公の抑制された語りのなかに作者イシグロが込めた社会批判を見出し、エコロジーという観点から本作品のディストピア小説としての側面に迫った。このように本論文は、先にも述べたとおり、ユートピア文学が特色とする理想提示と現実批判の構造を、テキスト分析から明らかにしようとする手法において、一貫した姿勢を貫いている。その結果、立論の形式が整っているという構成上の強みがある一方で、論旨がやや図式的になりがちな傾向を含んでいることも否定できない。しかし、16世紀から現代に及ぶユートピア文学の系譜を一望し、その特性を明らかにするという大胆な試みに果敢に取り組み、エコクリティシズムという新領域で独自の研究成果をまとめ上げるという初志を貫徹した論者の熱意と力量は、高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年3月14日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降